

はじめに

地域が広大で歴史と民族との複雑なアジアはまことに歴史地理学的研究の宝庫であるといえよう。しかし従来各地域における歴史的研究は一応かなり精密におこなわれてはきたものの、実際の歴史地理学的研究はこれに及ばなかった。そこにはホイットリーが最近の『マライ半島の歴史地理』の序文でいうごとく、『フリーマンからブラウンに至るまで従来の歴史地理学者はその研究を確信を以て受容できるすでに確立された歴史の範囲に適用してきたが、東南アジアではこれが不可能であるために、研究者はまず一応これまでに知られた歴史のアウトラインをみずから確認する責任から始めねばならぬ』困難があつたのである。これは他の多くのアジア諸地域についても同様であつたらう。ましてわれわれ日本人の研究者の場合はこれまで日本や中国の一部に関するものを除けば他地域に及ぶことが極めて少なかった。これは文献が各国語に亘るため、史料処理の複雑さに加えて現地調査も自由におこない得ない事情にもよつたことが多いが、いつまでもかかる状態に甘んずることはもとよりわれわれの承服できるところではなかつた。

幸い第二次大戦を契機として世界各国の関心がアジアに集まるとともに、今日人文科学の諸分野におけるアジア研究の盛んなこと、まことに過去にその比を見ないほどである。しかもこの場合も他の諸学に比べてなぜか歴史地理的研究だけは遅れをとつてきたかに見えた。

筆者は今春マラヤのクアラ・ルンプールで開催された東南アジア地理学会議に出席することができたが、そこでの

研究発表に「歴史地理学」の部門が設けられているのを知って大いに意を強くした。しかもそこでみられた発表のテーマに第二次大戦後の地域社会の変動に関するものが多かったのもむしろ意外であった。日本でならば一般の「人文地理」として扱われるべきであろう最近の地域の変化もここでは「歴史地理」として扱われていることを知ったのである。すなわち植民地時代から新興の独立国へのこのわずかな時間の問題を扱うのもまたアジアでは歴史地理の重要なテーマとなるわけなのであった。

このような最近の一般的情勢の下にわれわれはここに『歴史地理学紀要第四集』として日本ではじめて東アジアから東南アジア、さらに北アジアなど各地域を対象とする歴史地理のモノグラフを編集しえたことを大きな誇とする。われわれはこれを一つの出发点として、またかってかれらにとつては全く異質的な地域でさえあった東南アジアの歴史地理に先駆的なメスをいれたブラデル、クーデ、フェラン、ゲリニ、ヒルト、ペリオ、シュレーヘルらの努力と業績を想起しつつ、今後さらにアジア各地の歴史地理学的研究に邁進したいと考えるものである。

一九六二年六月